

那霸市文化財調査報告書第 102 集

那 霸 市 内 遺 跡 VI

— 首里崎山村跡 —

2015 年 3 月

那 霸 市 文 化 財 課

那覇市内遺跡Ⅵ

— 首里崎山村跡 —

2015年3月

那覇市文化財課

序

本報告書は、「個人住宅建設事業」に伴って発掘調査を行った「首里崎山村跡」の成果を取めたものです。

本遺跡は那覇市首里崎山町に存し、平成20年3月から同年5月にかけて調査が行われました。

調査地は近世の屋敷跡のほか、グスク時代に相当すると考えられるピット群が検出されました。

首里崎山町は、世界遺産「首里城跡」に隣接し、琉球王家にとって主要な拝所のひとつである崎山御嶽や、王家別邸の「東苑」などが存し、王都の中でも重要な位置づけがなされていた場所です。今回の調査においては、グスク時代のピット群の検出により、琉球王府以前の崎山の姿を知る手がかりを得ることができました。今後の調査・研究に繋がる、注目される成果となりました。

末尾になりましたが、発掘調査作業ならびに、本報告書を作成するにあたってご協力いただきました関係各位の皆様深く感謝申し上げます。

平成27年3月

那覇市長 **城間 幹子**

例 言

1. 本書は、那覇市市民文化部文化財課が「個人住宅建設事業」に伴って、平成20年度から平成21年度にかけて実施した「首里崎山村跡緊急発掘調査」の成果を収録したものである。
2. 第2図・第3図は、2009（平成21）年11月1日付国土地理院発行の那覇市全図（部分）に加筆した。
3. 第4図は、1998（平成10）年3月付那覇市文化局歴史資料室発行の「首里地区旧跡・歴史的地名地図」に加筆した。
4. 第5図は、米軍が1947（昭和22）・1948（昭和23）年に撮影した航空写真をもとに、1949（昭和24）年に作成した地図（縮尺1:4,800）に加筆した。
5. 第6図は、沖縄タイムス1976（昭和51）年8月19日付「思い出のわが町」掲載の「昭和初期戦前の字崎山町民俗地図」をトレースして修整・加筆した。
6. 第7図は、1994（平成6）年3月付沖縄県教育委員会発行の『琉球国絵図史料集 第三集 -天保国絵図・首里古地図及び関連資料-』に掲載の「首里古地図」に加筆した。
7. 第8図は、昭和63年12月那覇市税務資産税課発行の現況・地籍併合図に、首里古地図を重ね合わせ作成した。
8. 本報告書の執筆は下記の通りである。
樋口 麻子（那覇市市民文化部文化財課主任専門員）第1章～第7章
9. 資料整理は下記のメンバーで行った。
実 測：石原愛子・請盛智秋・国吉真由美・西銘定子・宮城みさ子・山下美也子
分類・集計：石原愛子・請盛智秋・高良夏枝・仲井真美佐枝・西銘定子・宮城みさ子
表 図：石原愛子・岡本玲子・高良夏枝・宮城みさ子
復 元：請盛智秋・国吉真由美・西銘定子
ト レ ース：石原愛子・請盛智秋・国吉真由美・高良夏枝・宮城みさ子・山下美也子・渡辺幸夫
拓 本：石原愛子・西銘定子
写 真 撮 影：請盛智秋・山下真利子
10. 遺物実測図の番号と写真の番号は一致するように配置してある。
11. 本書に掲載した発掘調査に関する写真・実測図などの記録、および出土遺物は那覇市市民文化部文化財課にて保管している。

『那覇市内遺跡VI—首里崎山村跡—』報告書目次

序		
例言		
第I章	調査に至る経緯	1
第II章	遺跡の位置と環境	3
	那覇市の地理的環境	3
	遺跡の歴史的・地理的環境	3
第III章	調査経過と調査組織	13
	第1節 調査経過	13
	第2節 調査組織	13
第IV章	層序	14
第V章	遺構	14
第VI章	遺物	29
	1. 白磁	29
	2. 青磁	29
	3. 青花	30
	4. 東南アジア産陶器	30
	5. 土器	30
第VII章	総括	35

報告書抄録

挿図目次

- 第 1 図 那覇市の位置
- 第 2 図 那覇市内における調査地位置
- 第 3 図 調査地周辺拡大
- 第 4 図 米軍作成地形図における調査地周辺
- 第 5 図 首里地区旧跡・歴史的地名地図における調査地周辺
- 第 6 図 戦前の崎山町民俗地図
- 第 7 図 首里古地図における崎山村
- 第 8 図 昭和 57 年現況・地籍併合図と首里古地図重ね合わせ
- 第 9 図 層序①
- 第 10 図 層序②
- 第 11 図 層序③
- 第 12 図 調査区平面、石垣立面・平面
- 第 13 図 ビット群
- 第 14 図 円形遺構
- 第 15 図 石敷遺構
- 第 16 図 白磁・青磁
- 第 17 図 青花①
- 第 18 図 青花②
- 第 19 図 東南アジア産陶器・土器

図版目次

- 図版 1 掘削作業状況
- 図版 2 掘削・測量・完掘・石垣検出状況
- 図版 3 石垣・円形遺構・石敷遺構検出状況
- 図版 4 ビット群検出・半裁・完掘状況
- 図版 5 白磁・青磁・東南アジア産陶器
- 図版 6 青花①
- 図版 7 青花②
- 図版 8 土器

挿表目次

- 第 1 表 白磁観察一覧
- 第 2 表 青磁観察一覧
- 第 3 表 青花観察一覧
- 第 4 表 東南アジア産陶器観察一覧
- 第 5 表 土器観察一覧
- 第 6 表 出土遺物一覧

第1章 調査に至る経緯

- 2008（平成20）年8月5日 埋蔵文化財事前審査願（審査番号20-50）が、株式会社レオパレスより提出される。
- 同年8月11日 埋蔵文化財事前審査報告書による回答を行う。
申請地は、首里古地図において「崎山村」の「真壁大あむしられ」の屋敷の一部に該当していることから、保存のための調整が必要であるとした。株式会社レオパレスと調整の結果、既存建物の撤去時に立会調査を行うこと、撤去後には試掘調査を行うこととなった。
- 2009（平成21）年1月23日 建物撤去作業に伴う立会調査を行った。一部に石垣が確認される。
- 同年2月3日～7日 調査作業員2名を雇用し、試掘調査を行う。石垣以外にピットも確認される。遺構は主に敷地南側に残存していた。このため、敷地南側を対象に発掘調査を行うこととした。
- 2009（平成21）年2月23日 施主へ「那覇市首里崎山町1丁目31・31-2・31-3における埋蔵文化財発掘調査について（協力依頼）」を送付する。調査までの手続きの概略を説明し、協力を要請した。
- 2009（平成21）年3月6日 当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地「首里崎山村跡」であるとの認識に基づき、施主より文化財保護法第93条第1項（発掘の届出）の提出を受ける。那教生文第457号として沖縄県教育委員会へ進達依頼を行う。
- 2009（平成21）年3月12日 沖縄県教育委員会より平成21年3月9日付教文第1795号として「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（回答）」を受領する。これにより、工事着手前の発掘調査の実施を指示される。
この文書を同日付で施主に送付し、併せて発掘調査承諾書の提出を依頼した。
- 2009（平成21）年3月16日 那教生文第483号として文化財保護法第99条第1項「埋蔵文化財発掘調査について（着手届）」を、沖縄県教育委員会へ提出した。



第1図 那覇市の位置

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

那覇市の地理的環境

那覇市は、沖縄本島南西部に位置し、北は浦添市、東は西原町・南風原町、南は豊見城市と接し、西は東中国海に面する。面積は39.23km²、人口323,075人（平成26年11月末現在）を擁する県都である（第1・2図参照）。

市域の東側には、標高約165mの弁ヶ嶽を頂点とする首里台地がある。首里台地は、基盤の島尻層の上に形成された石灰岩段丘からなる。市域の北側には、標高約30～50mの緩やかな天久台地が、南側には標高約30～60mの起伏のある小祿台地がある。これらの台地に囲まれ、中央部は標高約10mの低地となっている。

市域北側に安謝川、中央部に安里川、南側に国場川が東から西方向に流れ、東中国海へと注いでいる。国場川下流域は漫湖と呼ばれ、大きな入江となっていたが、現在は埋め立てられ川幅も狭くなり、その景観は大きく変貌している。

沖縄本島中南部は、第三紀鮮新世島尻層群を基盤層としており、那覇市も同層が基盤である。この層は下位から上位へ豊見城層・与那原層・新里層に細分される。豊見城層は、砂岩と泥岩の互層からなり、下部は泥岩、上部は砂岩が優勢である。小祿から安里方面にかけて分布する小祿砂岩層（通称：ニービ）は、この上部砂岩に属する。

この島尻層を覆っているのが、第四紀更新世琉球石灰岩層であり、首里台地周辺部・山下町周辺部・天久台地などに分布している。

さらに、この石灰岩層を覆っているのが、安謝粘土層である。これは、風化土壌の二次堆積とみられ、那覇港沖（新港埠頭）海底下で最大層厚11mと特に厚い。陸上の風化土（通称：島尻マージ）と層厚に違いがみられるものの、非常に類似した層である。

那覇市街地からその沖合までの低地には、第四期完新世堆積物である沖積層が広く分布しており、特に安謝川・安里川・国場川下流域でみられる。

遺跡の歴史的・地理的環境

調査地は、那覇市首里崎山町1丁目に存する。「首里城跡」の南東に位置し、かつては崎山村に属していた（第2・3図参照）。現在の首里崎山町は、崎山公園一帯（首里崎山町1・2丁目）から、県道82号線より東側（同3丁目）と、南は沖縄県農業試験場跡地まで（同4丁目）を含む地域である。首里古地図による往時の村域は、1・2丁目と東端は県道82号線まで、南端はカトリック首里教会から雨乞御嶽にかけての範囲であった（第7図参照）。隣接する赤田村（現在の首里赤田町）・島小堀村（首里島堀町）とともに「首里三箇」と呼称され、近世期の行政区である首里三平等のうちの南風之平等に属していた。ここは、首里台地上の標高約120mの高地であるが、周囲を首里城・虎頭山丘陵・弁ヶ嶽・雨乞御嶽などの丘陵に囲まれた窪地であり（第4図参照）、水量が豊富で、かつては水田が広がっていた。1677（康熙16）年には、王家の別邸であり冊封使らを歓待した東苑（御茶屋御殿）が創建されている。その西隣が雨乞御嶽である（第5図参照）。神名は、「天通ルアマオレツカサノ御イベ」で、干ばつの際には琉球国王が神女らと共に幸し、雨乞祈願を行った。

崎山村は、次第に人口が増え宅地化が進行する。首里古地図によると、村内には東苑・雨乞御嶽の

ほか、住宅53戸、寺（健善寺）や池があり、所々に田畑がある。村内を東西に貫く通りは「崎山馬追（馬場）」であり、通りの北側に国王の観覧席も設けられていた。

首里八景の一つである「崎山竹籬」とは、この一帯のことであった。東苑や雨乞御嶽の美しさや眺望の素晴らしさが詩歌に詠われており、ここが風光明媚な地であったことがうかがえる。

崎山村の北西端には、現在は崎山公園となっている「崎山御嶽」がある。この地は、察度王の子といわれる崎山里主の屋敷であったとの伝承がある。崎山里主の墓とされる拝所が御嶽の本体であり、琉球王府時代に上級女官の一人である首里大阿母志良礼が参拝を行った場所であった。

「崎山御嶽」は、1998（平成10）年～1999（平成11）年にかけて那覇市教育委員会によって発掘調査が行われ、多量の大和系瓦が得られている。これらは、共存遺物である中国産陶磁器により14世紀代に属するとみられる。このことから、当該時期に瓦葺き建物が存在したと考察されている。

1835（道光15）年、村学校設立令が発令され、崎山村にも「啓蒙館」が設置された。1879（明治12）年、廃藩置県により沖縄県所属となり、首里役所が設置されその管理下におかれる。翌1880（明治13）年、首里を7管区に分割した際に崎山村は赤田村役場の管理下となり、県の直接管轄となる。1896（明治29）年首里区の字となる。

明治期の崎山は、人口密集地域であった。廃藩置県後は、豊富な水量と労働力を利用して大規模な泡盛醸造業が営まれた。醸造所が建ち並び泡盛の一大産地であったが、第二次世界大戦によって破壊される。戦後、一部が再建され、現在まで引き継がれている。

1914（大正3）年、崎山町1～4丁目となり、1921（大正10）年からは、首里市崎山町となる。1954（昭和29）年、那覇市崎山町、1956（昭和31）年、那覇市首里崎山町となった。

戦後、一帯は廃墟と化していたが、次第に人口が増加した。1946（昭和21）年、東苑の菜園跡に城南初等学校（現在の城南小学校）が開校する。1952（昭和27）年には、東苑跡がカトリック教会へ払い下げられた。

現在は、さらに宅地化が進み住宅密集地となっているが、雨乞御嶽や崎山御嶽からの眺望は素晴らしく、往時の様子をしのばせる。

参考・引用文献

那覇市の地理的環境

古川博基 「第一章 古那覇の自然 第一節 地形・地質 一 地形」『那覇市史 通史編 第1巻』

那覇市企画部文化振興課 那覇市役所 1985

古川博基 「Ⅲ 島の地質誌 Ⅲ B 中琉球 8 沖縄島南部」『琉球島の地質誌』木崎甲子郎
沖縄タイムス社 1985

古川博基・高里良政 「三、地形・地質 （一）那覇市の土地の成り立ち」

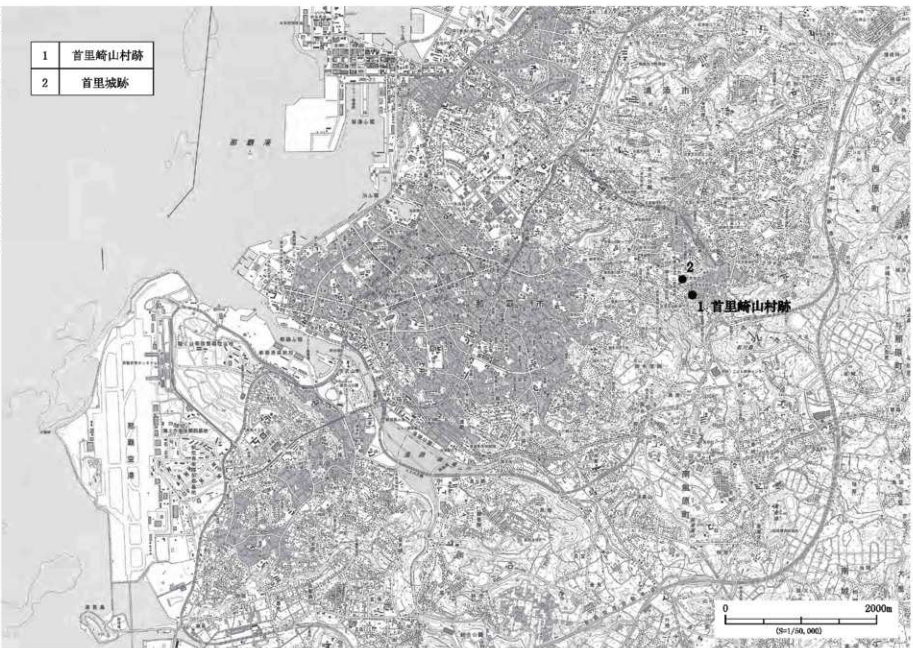
『那覇市歴史地図・文化遺産調査報告書』 那覇市教育委員会 1986

「総論 自然環境」『日本歴史地名体系第四八巻 沖縄県の地名』有限会社 平凡社地方資料センター
株式会社 平凡社 2002

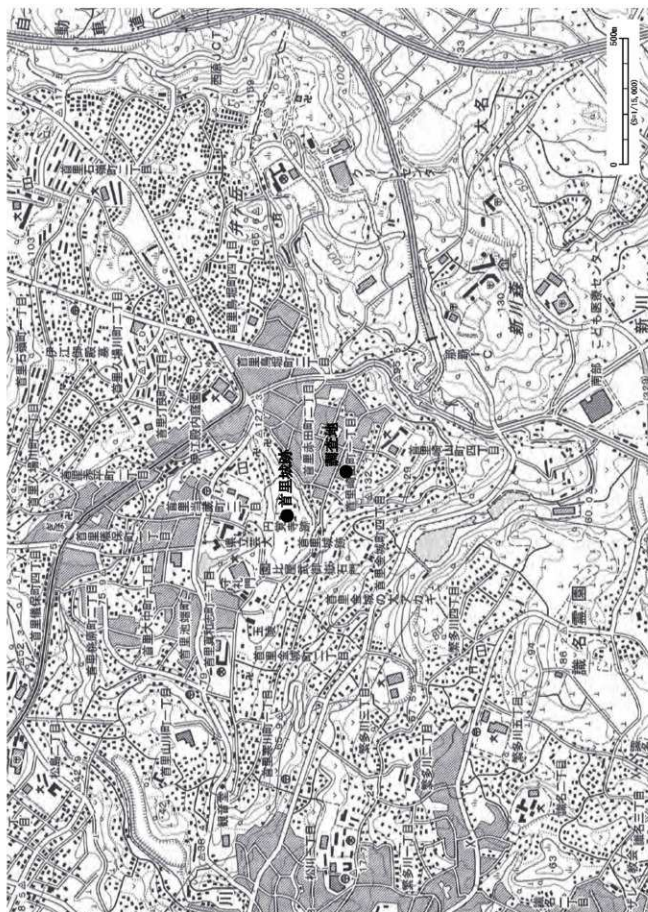
「沖縄県中南部域の地質」『沖縄県史図説編 県土のすがた』（財）沖縄県文化振興会
沖縄県教育委員会 2006

遺跡の歴史的・地理的環境

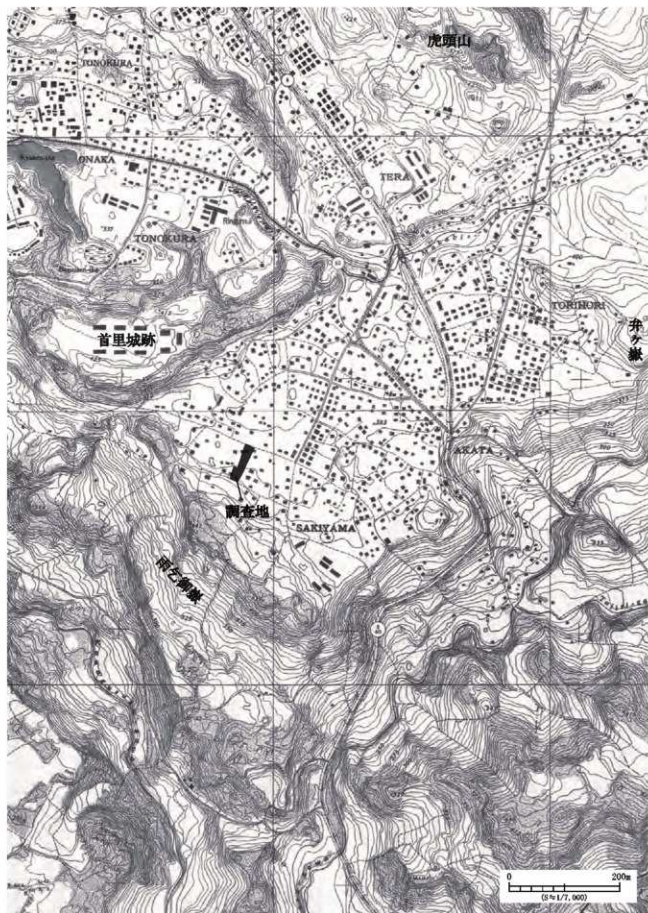
- 「思い出のわが町 〈19〉 崎山町」 沖縄タイムス 1976.8.19 記事
- 渡名喜聰・多和田真淳「第一章 社会生活 第一節 各区域の概況 一 旧首里 (三) 南風平等・三個」
『那覇市史 資料編 第2巻中の7 那覇の民俗』 那覇市企画部市史編集室 1979
- 「雨乞い御嶽」『崎山』『崎山御嶽』『崎山御嶽遺跡』『首里三箇』『東苑』『沖縄大百科事典』
沖縄大百科事典刊行事務局 沖縄タイムス社 1983
- 真栄平房敬「二、各地区の概要 (一) 首里地区」『那覇市歴史地図 - 文化遺産悉皆調査報告書 -』
那覇市教育委員会 1986
- 『崎山』『角川日本地名大辞典 47 沖縄県』『角川日本地名大辞典』編纂委員会 角川書店 1986
- 『那覇市 崎山村』『日本歴史地名体系第四八巻 沖縄県の地名』 有限会社 平凡社地方資料センター
株式会社 平凡社 2002
- 島弘ほか『崎山御嶽遺跡 - 首里崎山公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 -』
那覇市文化財調査報告書第67集 那覇市教育委員会 2005



第2図 那覇市内における調査地位置



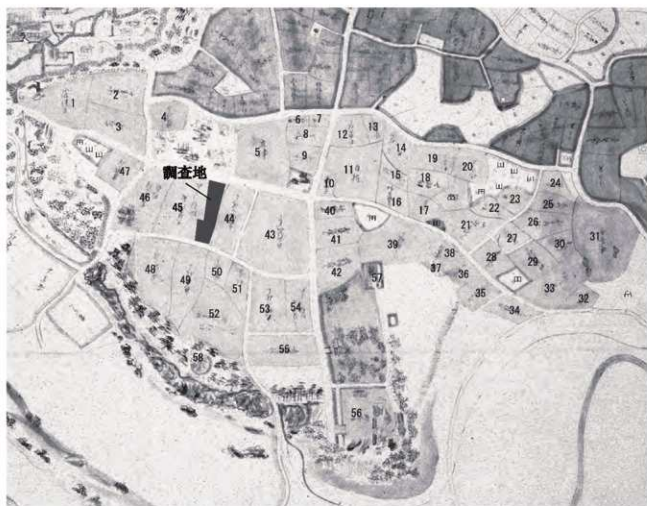
第3図 調査地周辺拡大



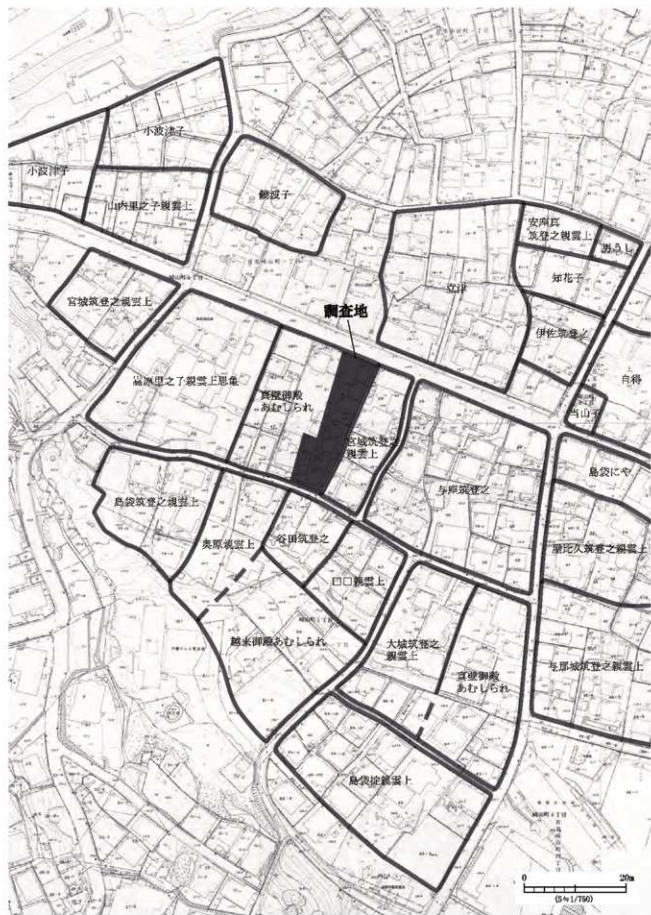
第4図 米軍作成地形図における調査地周辺

崎山村

- | | |
|--------------|---------------|
| 1 小波津子 | 31 樓等寺 |
| 2 小波津子 | 32 玉城にや |
| 3 山内里之子親雲上 | 33 堀川筑登之親雲上 |
| 4 鶴登子 | 34 与那嶺筑登之 |
| 5 立津 | 35 烏袋控親雲上 |
| 6 安庭高筑登之親雲上 | 36 金城トヤ |
| 7 男ウシ | 37 池 |
| 8 知花子 | 38 又右筑登之親雲上 |
| 9 伊佐筑登之 | 39 真玉権親雲上 |
| 10 当山子 | 40 烏袋にや |
| 11 白得 | 41 屋比久筑登之親雲上 |
| 12 前家久親雲上 | 42 与那城筑登之親雲上 |
| 13 比喜筑登之 | 43 与那筑登之 |
| 14 宮□親雲上思□ | 44 宮城筑登之親雲上 |
| 15 与那嶺筑登之親雲上 | 45 真壁御殿あむしられ |
| 16 城野筑登之 | 46 出原里之子親雲上思集 |
| 17 百名控親雲上 | 47 宮城筑登之親雲上 |
| 18 新城子 | 48 烏袋筑登之親雲上 |
| 19 知念にや | 49 奥原親雲上 |
| 20 結雨にや | 50 谷田筑登之 |
| 21 前平親雲上 | 51 □□親雲上 |
| 22 知念にや | 52 城文御殿あむしられ |
| 23 男にや | 53 大城筑登之親雲上 |
| 24 照屋子 | 54 真壁御殿あむしられ |
| 25 與我里之子親雲上 | 55 烏袋控親雲上 |
| 26 嘉手苺親雲上 | 56 御茶屋 |
| 27 勘手納筑登之親雲上 | 57 池 |
| 28 平良筑登之 | 58 雨之御殿 |
| 29 神谷控親雲上 | |
| 30 喜路親雲上後家 | |



第7図 首里古地図における崎山村



第8図 昭和57年現況・地籍併合図と首里古地図重ね合わせ

第三章 調査経過と調査組織

第1節 調査経過

2009（平成21）年3月、工事開始期が同年5月に迫っていたことから、施主より発掘調査に対する内諾を得て、重機による表土剥ぎ作業を開始した。調査補助員1名、調査作業員2名を雇用し、調査に臨んだ。表土剥ぎ作業に先立って磁気探査を行ったが、調査地全域において反応があったため、表土剥ぎ作業と並行しての探査作業となった。

この表土剥ぎ作業によって、東西に延びる石垣（石垣1）やそれに付随する石垣（石垣2）、このほか石敷遺構などが確認された。

グリッド設定作業を行い、南北にS～Y、東西に41～43と番号を付した。各グリッド北西方向の杭が、各々のグリッド番号杭である。

試掘調査の際に設定したトレンチNo.1とNo.4にみられる層序を、本遺跡の基本層序とした（第9・10図参照）。石垣や円形遺構・石敷遺構は、表土剥ぎ作業の際に既に検出されていたため、それらの遺構の清掃・撮影・図面作成作業を行った。表面清掃を行った際に、U43グリッドに多数のピットが検出され、その状況から畑跡であると判断した（第13図・図版4参照）。各グリッドの掘下作業を行い、土層堆積状況を撮影・観察し、図面を作成した。

作業期間中は比較的好天に恵まれたが、雨が降ると水が溜まり、水中ポンプによる汲み上げが必要であった。足元もぬかるみがひどく、泥にまみれての作業となった。

調査は、2009（平成21）年5月1日まで行い、終了した。

第2節 調査組織

本遺跡の調査組織は、次の通りである。

事業主体	那覇市教育委員会	教 育 長	桃原 致上	(平成18年度～平成21年度)
"	"	教 育 長	城間 幹子	(平成22年度～平成24年度)
"	那 覇 市	市 長	翁長 雄志	(平成25年度～平成26年度)
"	"	市 長	城間 幹子	(平成26年度)
事業所管	文 化 財 課	課 長	古塚 達朗	(平成15年度～平成26年度)
調査総括	文 化 財 課	副 参 事	島 弘	(平成19年度～平成26年度)
調査事務	文 化 財 課	副 参 事	島 弘	(平成19年度～平成26年度)
"	"	主 幹	田端 睦子	(平成20年度)
"	"	主 幹	内間 靖	(平成21年度～平成26年度)
"	"	主 査	會澤 一大	(平成23年度～平成24年度)
"	"	主 査	新里 清美	(平成25年度～平成26年度)
"	"	主 任 主 事	仲宗根 健	(平成21年度～平成23年度)
調査事務	文 化 財 課	主 任 主 事	瑞慶山由香里	(平成25年度～平成26年度)
"	"	主 事	新里真知子	(平成20年度)

調査員	文化財課	副参事	島 弘
"	"	主 幹	内間 靖
"	"	専門員主査	玉城 安明
"	"	専門員主査	仲宗根 啓
"	"	主任専門員	樋口 麻子
"	"	主任専門員	當銘 由嗣
"	"	主任専門員	知念 政樹
"	"	学 芸 員	安斎真知子

発掘調査作業員（順不同）

浦崎京子・島仲恵子・伊波かおり（発掘調査補助員）・上江洲由昇・翁長しのぶ・津波あずさ・仲井真美佐枝・阿部直子・渡辺幸夫

第Ⅳ章 層序

調査地は、南北方向に傾斜しており、南が高位で、北が低位である。石垣1を境界として、南北で堆積土層が異なっていた。土質は基本的にはシルト質であるが、北側の土層がより粘性が高い。基盤層は、鳥尻粘土層（通称：クチャ）であった（第9・10・11図参照）。

層序の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版 標準土色帖』1997年版を参照した。

第Ⅴ章 遺構

遺構は、グスク時代に属するもの（ビット群）・近世に属するもの（石垣）・近現代に属するもの（円形遺構・石敷遺構など）が検出された。

地形は南北に傾斜しており、南が高位で、北が低位である。南側においてビット群、北側において石垣・円形遺構・石敷遺構が検出された。

当該地は、近世期には「真壁御殿あむしられ」の屋敷地であり（第8図参照）、この屋敷地は、現在6区画に分筆されている。調査は、このうちの1区画の一部を対象として行った。屋敷地は、現在の瑞泉酒造との境界までが範囲内であったと考えられる（第8図参照）。調査においては、礎石など建物をうかがわせる遺構は検出されなかった。

調査地南北面が通りに接しているが、高低差などを考え合わせると北の「崎山馬追い（馬場）」に面した位置に門口があったと想定される。

以下に各遺構の概要を記す。

グスク時代の遺構

ビット群 (第13図、図版4)

グリッド V43 ~ W43 にかけて、ビット群が確認された。これらは、トレンチ No. 1 の東西壁面においても確認されており (第9図参照)、大部分はⅧ層 (グスク時代相当) の時期に属するものである。一部はビット内部の土質の違いにより、近世期に属すると判断した。深度は約30cm (ビット No. 23・34・35) ~ 5cm (ビット No. 29・30 など) と、様々である。グスク時代と近世期のビットが混在してあったため、第13図においてはグスク時代のものを色濃く、近世期のものを淡く表示している。

なお、T ~ U43 グリッドやトレンチ No. 4 においてもビットが検出されている (第14・15図参照) が、これらは全て近世期に属するものである。

近世の遺構

石垣1・2 (第12図、図版2・3)

敷地を東西に横断する石垣1と、それに付随する石垣2が確認された。

石垣1:東西に横断する石垣である。使用石の直径20~30cm、残存高1.5mである。土層を切り取り、土留めとしてその法面に積み上げている。石垣3を貫通しており (図版2:4段目左参照)、ブロック塀によって仕切られているため判然としなが、東側隣地の石垣に連続する可能性がある。

石垣2:石垣1の前面に積み上げられている (図版3:2段目左参照)。使用石の直径30~50cm、残存高1.5mである。くぼみのある石も確認され、石材が再利用された可能性もある (図版3:1段目右参照)。床面は、鳥尻粘土層 (通称:クチャ) である。石垣2-②は石垣2の一部で、L字状に接する。

近現代の遺構

石垣3 (第12図、図版2・3)

使用石の直径20~30cm、残存高は70cm~1.0mである。積方は、粗雑な印象を受ける。比較的後世に構築された石垣と考える。

円形遺構 (第14図、図版3)

推定外径約1.2m、内径約80cmである。レンガを数詰めて構築しており、一部セメントによる修復がある。内部には土が充填されていた。廃棄物孔である「シーリ」の機能を有するものかと推測されるが、内部の掘削は未着手となったため、判然としない。

石敷遺構 (第15図、図版3)

石灰岩を敷詰めて構築している。中央に30cm×50cmの方形状の穴が開けられ、これは、トレンチ No. 4 方向へ延伸する溝と連結している。排水機能を有していたと推測される。

トレンチ№1 東壁



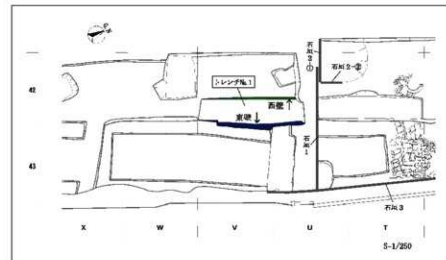
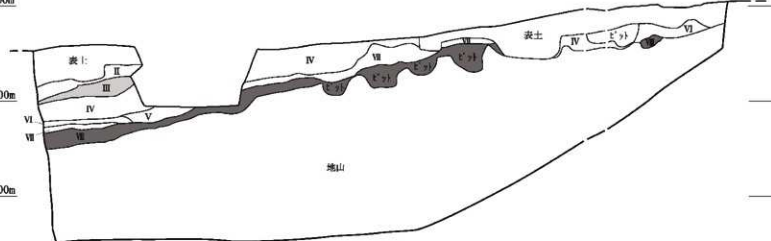
V43 | V43

V43 | V43

EL=116.000m

EL=115.000m

EL=114.000m



凡例

- II層 2.5YR 4/1(赤褐色)、基本的には、灰色を呈する。赤色粒子が多量に混入するため、全体的には明るい赤灰色となる。目①層は分層。
- III層 5YR 2/4(灰褐色)、赤色・黒色粒子が多量に混入している。
- IV層 2.5Y 4/2(暗灰褐色)、赤色・黒色粒子・石灰岩小粒子が多量に混入している。ニービ・クチャ粒が見られる。基本的には灰色を呈するが、全体的には、黄色みの強い暗灰褐色である。
- V層 7.5Y 4/5(鈍褐色)、基本的には褐色を呈する。灰色粒子が混在するため、鈍褐色となる。黒色粒子が多量に混入している。
- VI層 5Y 2/5(灰オリーブ色)、基本的には灰色を呈するが、褐色が混入しており、灰オリーブ色となっている。黄色粒子が散見される。ニービが少量混入する。
- VII層 10YR 4/6(褐色)、基本的には褐色を呈するが、灰色が混入しているため、褐色となっている。赤色粒子・マンガン・ニービ粒子が見られる。目②-④層は分層。
- VIII層 10YR 3/5(鈍黄褐色)、基本的には褐色を呈するが、灰色と褐色が混ざるため、鈍黄褐色となる。マンガン粒子・炭が多量に含有する。ニービ粒子が少量混入する。

トレンチ№1 西壁

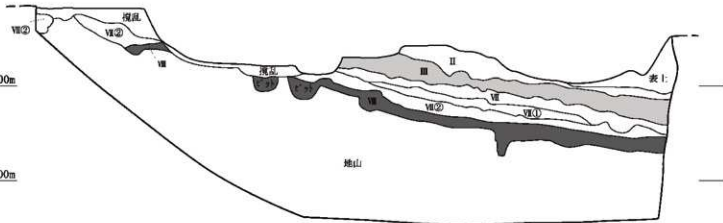
W43 | V43

V43 | U43

EL=116.000m

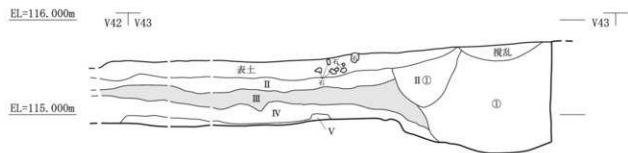
EL=115.000m

EL=114.000m

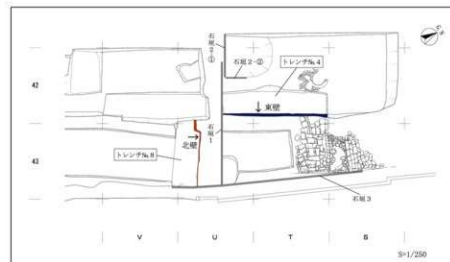
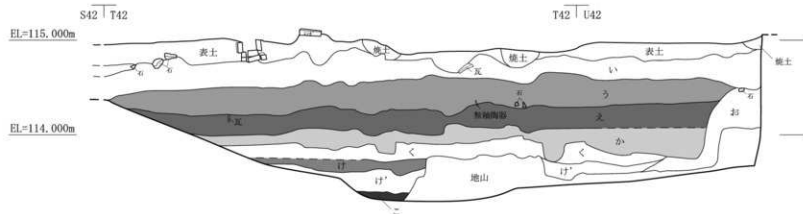


第9図 層序①

トレンチNo.8 北壁



トレンチNo.4 東壁



凡例

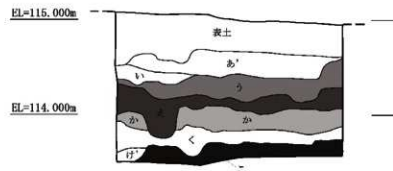
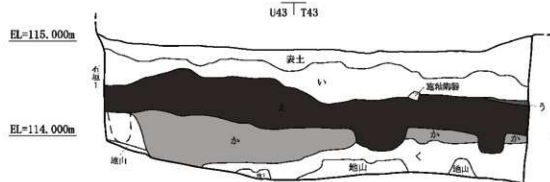
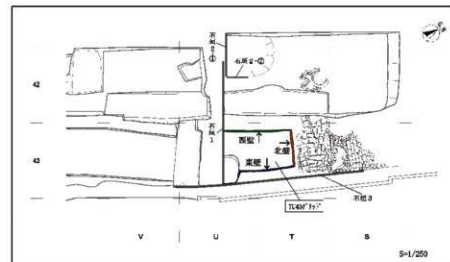
- II層 2.SY 4/1(赤灰色)。基本的には、灰色を呈する。赤色粒子が多量に混入するため、全体的には明るい赤灰色となる。I①層は分離。
- III層 2.SY 2/4(灰褐色)。赤色・黒色粒子が多量に混入している。
- IV層 2.SY 4/2(暗灰黄色)。赤色・黒色粒子・石灰質小粒子が多量に混入している。コーピ・クチャ粒子が観察される。基本的には灰色を呈するが、全体的には、黄色みの強い暗灰黄色である。
- V層 7.SY 4/5(鈍褐色)。基本的に褐色を呈する。灰色粒子が混在するため、鈍褐色となる。黒色粒子が多量に混入している。
- ①層 トレンチNo.8にて確認される。灰褐色に赤土粒子・石灰質礫がブロック状に混入する。様々な色調の土が混ざり合っており、基本的にはI層のグループに入る。
- い層 5Y 3/5(灰オリーブ色)。基本的に灰色を呈するが、褐色粒子が混入するため、灰オリーブ色となっている。炭・小石・コーピ粒子を含有する。
- う層 7.SY 4/1(鈍灰色)。基本的に灰色を呈するが、鈍灰色を呈している。小石・炭を含有する。
- え層 7.SY 3/1(灰色)。基本的に灰色を呈するが、炭や鉱物などを含有するため、黒褐色となっている。石灰質礫・コーピ粒子を含有。
- お層 5Y 3/1(灰色)。石風1の粗粒層である。含有物はない。
- か層 7.SY 4/2(灰褐色)。基本的に褐色を呈するが、炭や灰色粘質土が多量に混入するため、灰褐色となっている。
- く層 7.SY 4/4(褐色)。基本的には鈍褐色を呈するが、灰色粘質土が混入するため、褐色となっている。1~3cmの礫・炭などが混入する。
- け層 7.SY 4/3(褐色)。基本的には褐色を呈するが、灰色粘質土が多量に混入するため、灰褐色となっている。1~3cmの礫・炭が混入する。
- け'層 7.SY 5/2(灰褐色)。基本的には灰色を呈するが、少量の褐色が混入するため、灰褐色となっている。1cm大の礫が混入する。
- こ層 7.SY 3/2(黒褐色)。基本的には褐色を呈するが、2~3cm大のクチャ粒子・炭粒子が混入する。

第10図 層序②

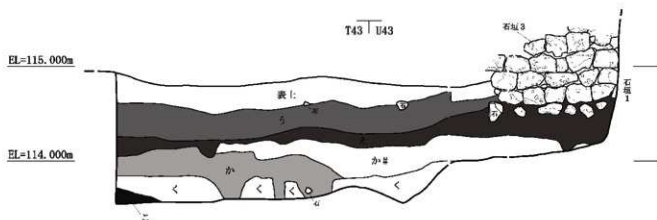
TU43分'リット' 西壁



TU43分'リット' 北壁



TU43分'リット' 東壁



凡例

あ' 層 7.Y 4/2 (灰オリーブ色)。基本的に灰色を呈するが、少量の灰土が混入するため、灰オリーブ色となっている。炭・石灰質・褐色粒子を含む。

い' 層 7.Y 3/3 (灰オリーブ色)。基本的に灰色を呈するが、褐色(ニヒ)が混入するため、灰オリーブ色となっている。炭・石灰質・ニヒ粒子を含む。

う' 層 7.Y 4/1 (暗灰色)。基本的に灰色を呈するが、暗灰色を呈している。小石・炭を含有する。

え' 層 7.SYR 3/1 (灰色)。基本的に灰色を呈するが、炭や腐植などを含有するため、黒褐色となっている。石灰質・ニヒ粒子を含む。

か' 層 7.SYR 4/2 (灰褐色)。基本的に灰色を呈するが、炭や灰色粘質土が多量に混入するため、灰褐色となっている。

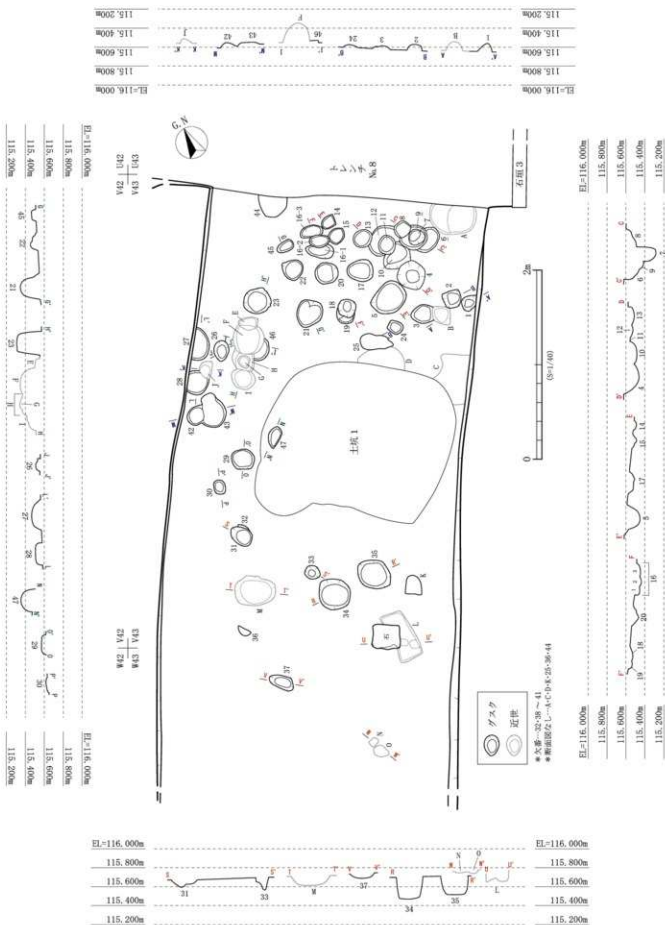
か# 層 7.SY 5/6 (明褐色)。基本的に褐色を呈するが、炭や灰色粘質土が多量に混入するため、灰褐色となっている。

く' 層 7.SYR 4/4 (褐色)。基本的に黄褐色を呈するが、灰色粘質土が混入するため、褐色となっている。1~3cmの礫・炭などが混入する。

け' 層 7.SYR 5/2 (灰褐色)。基本的には灰色を呈するが、少量の褐色が混入するため、明灰褐色となっている。1cm 次の礫が混入する。

こ' 層 7.SYR 3/2 (暗褐色)。基本的に暗褐色を呈するが、2~3cm 大のクワドロップ・炭粒が混入する。

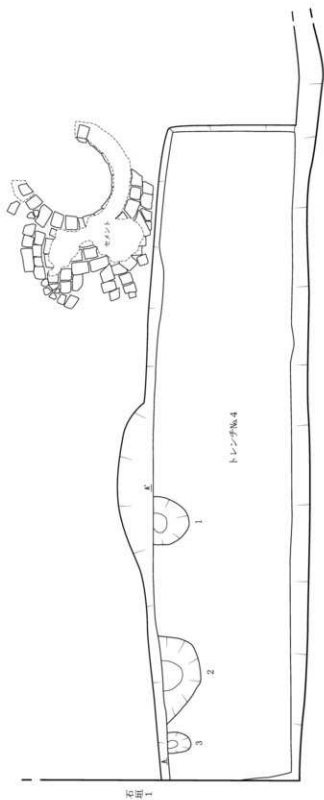
第 11 図 層序③



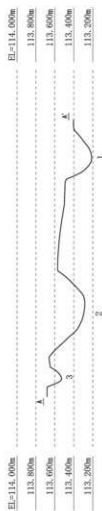
第13図 ピット群

T41 | T41
T42 | T42

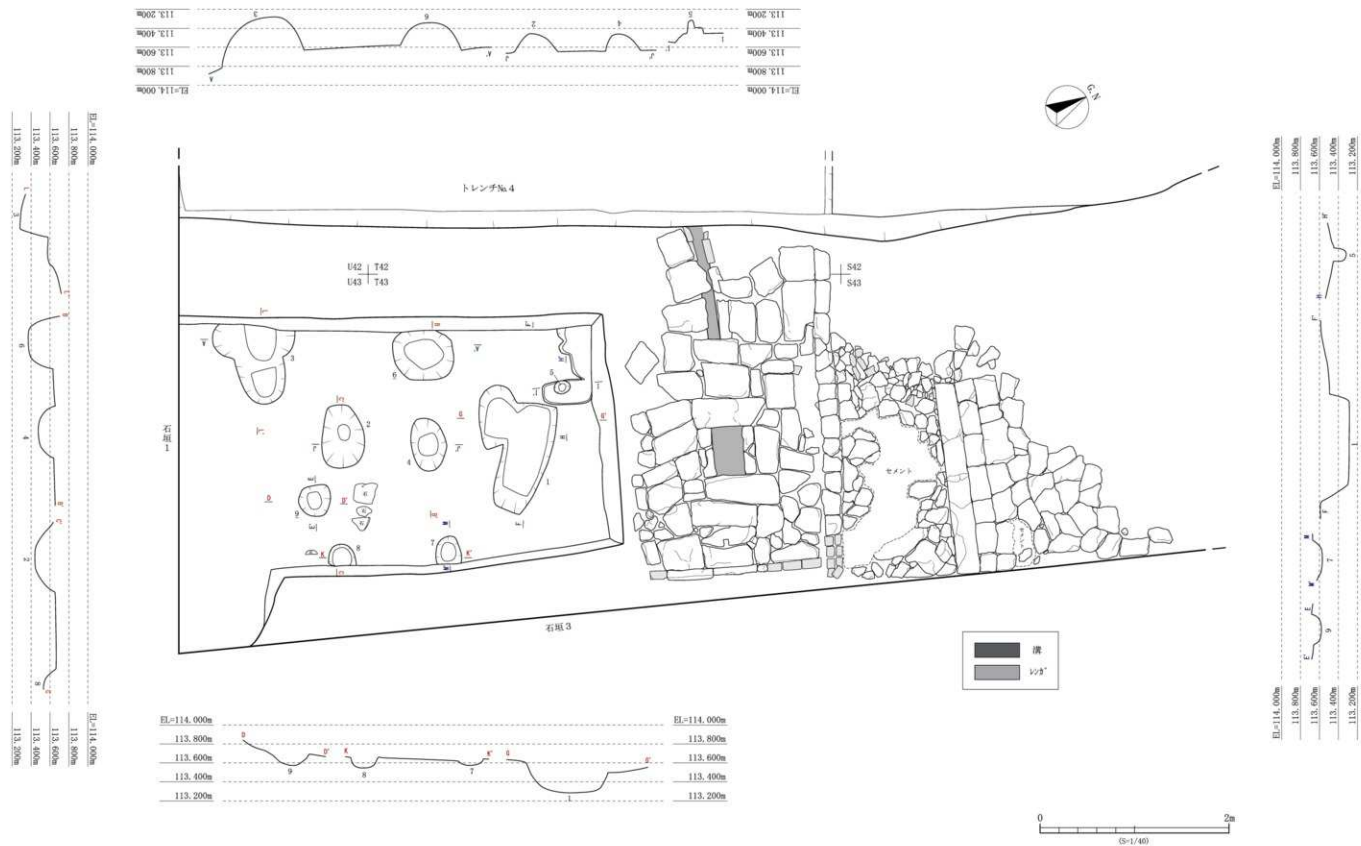
T41 | S41
T42 | S42



T42 | S42
T43 | S43



第14図 円形遺構



第15図 石敷遺構

第Ⅵ章 遺物

遺物は、総数 1,159 点出土した（第 6 表参照）。この内、沖縄産陶器が 574 点（49.5%）を占めている。沖縄産陶器の器種は、碗をはじめとして小碗・皿・杯などの食器類、壺・甕などの貯蔵具、鍋・播鉢・炉などの調理具、燭台・香炉などの生活雑貨と多様である。

瓦は、121 点（10.4%）が出土した。2 点が大和系瓦、ほかは全て赤瓦のいわゆる明朝系瓦である。これら赤瓦のうち、平瓦（62 点）が丸瓦（23 点）の約 3 倍多く出土している。

中国産・東南アジア産陶磁器も、それぞれ 154 点（13.3%）・33 点（2.8%）が出土した。中国産磁器の中では、その大半を青花（94 点）が占めている。器種は、碗が最も多い。

なお、紙面の都合上、今回掲載したのは、中国産磁器・東南アジア産陶器・土器のみである。沖縄産陶器ほかの遺物については、改めて報告する。

1. 白磁

第 1 表 白磁観察一覧

(単位: mm)

押回番号 図版番号	名称又は仮称	口径	器高	底径	素地	釉色・貫入	備考	出土地点 出土層位
第 16 図 1 図版 5 の 1	直口皿	92	23	42	灰白色	灰白色。貫入は無い。	胴部途中までの施釉。	トレンチ No. 8 ①層
第 16 図 2 図版 5 の 2	皿	—	—	66	灰白色	灰白色。貫入は無い。	器付部のみ無釉。	T43 か層
第 16 図 3 図版 5 の 3	香炉	—	—	—	白色	明青灰色。貫入は無い。	残存部は、全面施釉。内面に開線と、文様の一部が認められる。	T43 か層

2. 青磁

第 2 表 青磁観察一覧

(単位: mm)

押回番号 図版番号	名称又は仮称	口径	器高	底径	素地	釉色・貫入	備考	出土地点 出土層位
第 16 図 4 図版 5 の 4	二文蓮弁文碗	—	—	—	灰色	透過緑色。貫入は無い。	外面にのみ、文様がある。	層序不明一括
第 16 図 5 図版 5 の 5	雷文帯碗	—	—	—	白色	明緑色。内外面に荒い貫入がある。	外面にのみ、文様がある。	V43 1 層
第 16 図 6 図版 5 の 6	蓮弁文碗	—	—	—	灰白色	濁緑色。内外面に荒い貫入がある。	外面にのみ、文様がある。	トレンチ No. 8 掘戻層
第 16 図 7 図版 5 の 7	無文直口碗	132	—	—	灰白色	緑色。内外面に細かい貫入がある。	—	トレンチ No. 1 層序不明
第 16 図 8 図版 5 の 8	碗	152	—	—	灰白色	濁緑色。内外面に細かい貫入がある。	口縁部は、玉縁状に肥厚している。	トレンチ No. 1 層序不明
第 16 図 9 図版 5 の 9	碗	—	—	68	灰白色	濁明緑色。貫入は無い。	外底部は、無釉とみられる。	U43 か層
第 16 図 10 図版 5 の 10	碗	—	—	46	赤褐色	濁灰黄色。釉の発色は悪い。貫入は無い。	器付部から外底面にかけては、無釉である。	トレンチ No. 1 層序不明
第 16 図 11 図版 5 の 11	無文外反皿	126	—	—	灰白色	濁明緑色。内外面に荒い貫入がある。	口縁部が外反し、胴部に影らみをも有する。	トレンチ No. 4 2 層
第 16 図 12 図版 5 の 12	發花皿	142	—	—	灰色	濁暗緑色。貫入は無い。	内面にのみ、文様がある。	トレンチ No. 8 ①層

3. 青花

第3表 青花観察一覧

(単位: mm)

神図番号 図版番号	名称又は仮称	口径	器高	底径	素地	釉色・貫入	備考	出土地点 出土層位
第17図1 図版6の1	碗	—	—	—	白色	鈍青色。貫入は無い。	外面に文様がある。内面口縁土部に、1本の凹線がある。	層序不明一括
第17図2 図版6の2	碗	130	—	—	灰白色	明青色。貫入は無い。	口縁部が、外反した形状である。	トレンチ No. 4 層序不明
第17図3 図版6の3	碗	130	58	74	白色	鈍青色。貫入は無い。	口縁部が、外反した形状である。畳付部は、輪割ぎされている。	T43 か層
第17図4 図版6の4	碗	148	65	68	灰白色	鈍青色。貫入は無い。	口縁部が、外反した形状である。畳付部は、輪割ぎされている。	T43 か層
第17図5 図版6の5	碗	136	—	—	白色	鈍青色。貫入は無い。	口縁部が、外反した形状である。	T43 か層
第17図6 図版6の6	碗	138	—	—	白色	鈍青色。貫入は無い。	口縁部が外反し、胴部がやや膨らみを有した形状である。	T43 か層
第17図7 図版6の7	碗	—	—	76	青白色	淡青色。貫入は無い。	胴部がやや膨らみを有した形状である。畳付部は輪割ぎされている。	層序不明一括
第17図8 図版6の8	碗	122	—	—	白色	明青色。貫入は無い。	口縁部が、若干外反した形状である。	U43 え層
第18図1 図版7の1	碗	—	—	70	白色	明青色。貫入は無い。	胴下部が屈曲してたち上がる形状である。畳付部の幅は細く整形され、輪割ぎされている。	U43 V層
第18図2 図版7の2	碗	—	—	70	灰白色	透過緑灰色。貫入は無い。	内面は無釉であり、底面に重焼の痕跡がある。高台部が低く、畳付部は輪割ぎされている。	層序不明一括
第18図3 図版7の3	碗	—	—	49	白色	明青色。貫入は無い。	高台部は低く、畳付部は輪割ぎされている。	T43 え層
第18図4 図版7の4	皿	120	22	70	灰白色	暗青色。貫入は無い。	口縁部は外反し、平板に整形されている。畳付部は輪割ぎされている。器厚が薄く、丁寧に整形された印象を受ける。	トレンチ No. 8 ①層
第18図5 図版7の5	皿	—	—	40	灰白色	暗青色。貫入は無い。	畳付部は輪割ぎされている。基筒底である。	トレンチ No. 8 ①層
第18図6 図版7の6	蓋	100	—	92	灰白色	鈍青色。貫入は無い。	かかり部のみ無釉である。	層序不明一括

4. 東南アジア産陶器

第4表 東南アジア産陶器観察一覧

(単位: mm)

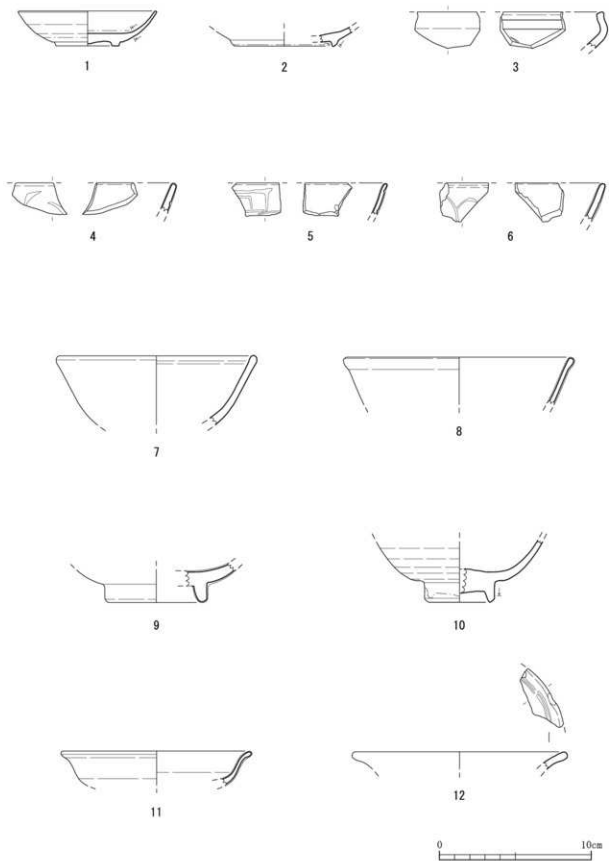
神図番号 図版番号	名称又は仮称	口径	器高	底径	素地	釉色・貫入	備考	出土地点 出土層位
第19図1 図版5の1	壺	—	—	108	暗赤褐色	黒褐色。貫入は無い。	内面は無釉。胎土に、白色鉱物を含有する。	TU43 か層
第19図2 図版5の2	壺	—	—	152	灰褐色	濃茶色。内外面に細かい貫入がある。	外底面は、無釉である。	U43 か層
第19図3 図版5の3	蓋	—	—	—	灰白色	暗紺色。貫入は無い。	内面は無釉。胎土に、黒色の微小な鉱物を含有する。	U42 層序不明

5. 土器

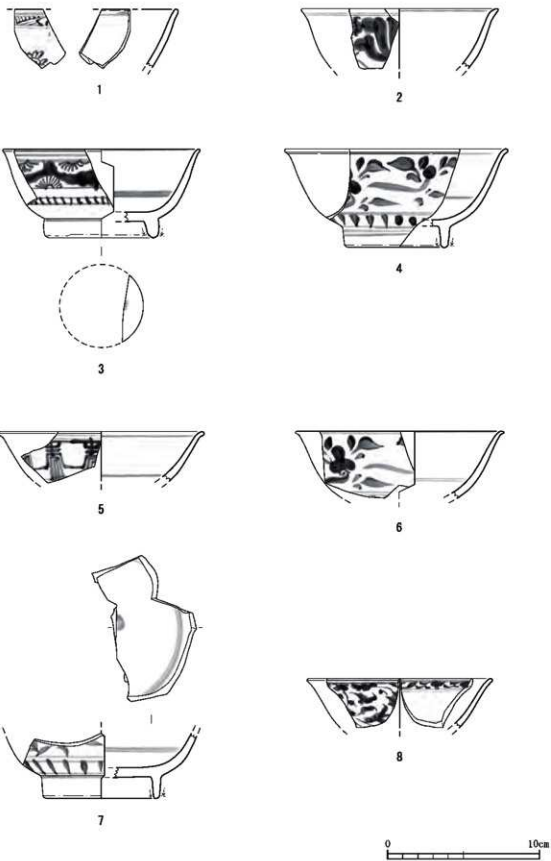
第5表 土器観察一覧

(単位: mm)

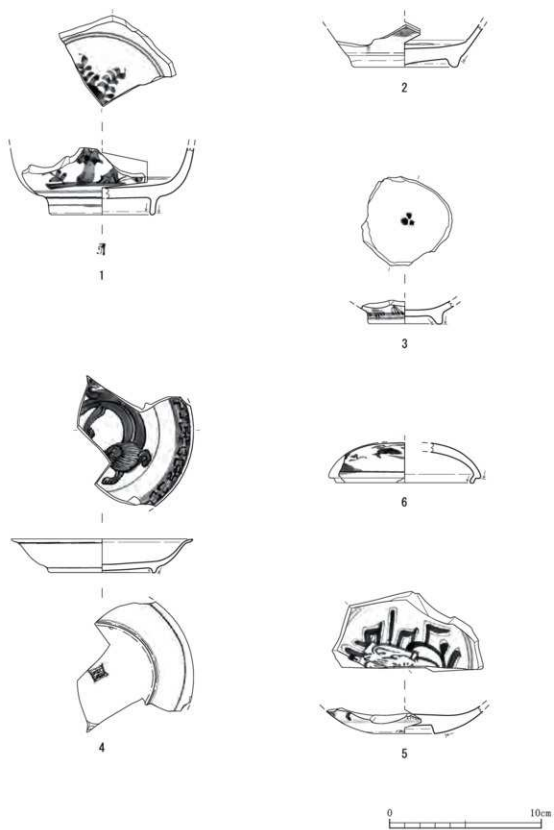
神図番号 図版番号	名称又は仮称	口径	器高	底径	胎土	色調(器色)	備考	出土地点 出土層位
第19図4 図版8の4	壺形	—	—	174	明灰褐色	内面: 鈍褐色 外面: 明褐灰色	胎土に、赤色粒子を含有している。外面に、削りの調整痕がある。	トレンチ No.8 ①層
第19図5 図版8の5	鉢形	166	—	—	明褐色	淡褐色	口縁部は、くの字状にたち上がる。胎土に赤色・光沢のある白色粒子などを含有する。	トレンチ No.8 ①層



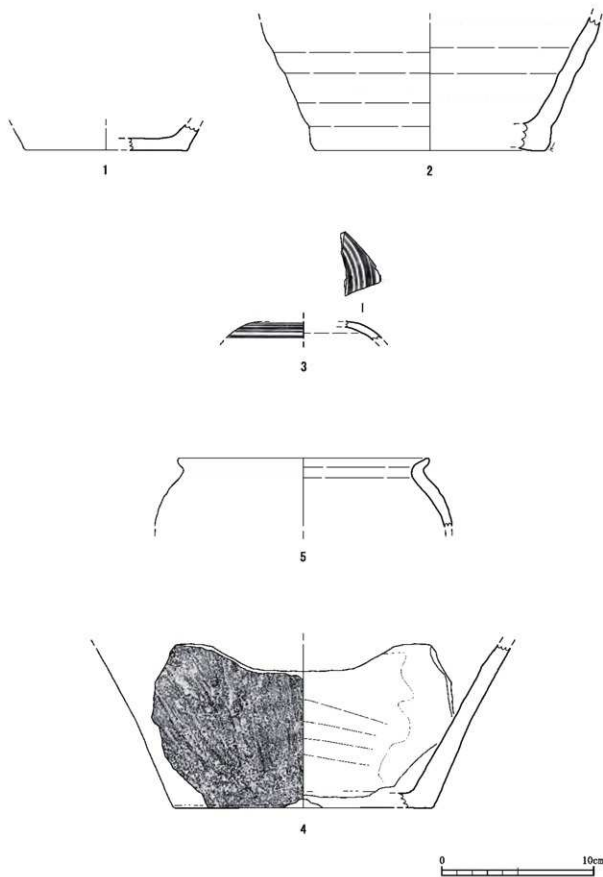
第16图(图版5) 白磁: 皿(1·2)、香炉(3)
青磁: 碗(4~10)、皿(11·12)



第17图(图版6) 青花①:碗(1~8)



第18図(図版7) 青花②: 碗(1~3)、皿(4・5)、蓋(6)



第19図(図版5) 東南アジア産陶器：壺(1・2)、蓋(3)
 (図版8) 土 器：壺形(4)、鉢形(5)

第七章 総括

本遺跡は、首里崎山町に存する。現在の崎山町の町域は、崎山公園付近（首里崎山町1・2丁目）から県道82号線より東側（同3丁目）と、南は沖縄県農業試験場跡地まで（同4丁目）を含む一帯である。しかし、18世紀前半作成の首里古地図によると、「崎山村」の村域は、現1・2丁目と東端は県道82号線まで、南端はカトリック首里教会から雨乞御嶽にかけての範囲であった（第7図参照）。

調査地は、「真壁御殿あむしられ」の屋敷地東側である。この屋敷は、現在の瑞泉酒造との境界までが本来の敷地であったと想定される（第8図参照）。真壁御殿は、尚貞王（1670～1710）の第三子小禄王子朝奇の三男向成毅が、祖母である尚貞王継妃真壁按司加那志の養子となり、真壁按司朝盈と称し元祖となった家柄である。「あむしられ」が神女の称号であることから、当該地は真壁御殿家における神女職の屋敷と考える。崎山村内には、「真壁御殿あむしられ」が本調査地を含め二軒存する（第7図中54）。この一軒も、調査地同様に神女職の屋敷と考えられる。なお、首里古地図によると、「真壁御殿」の屋敷は現在の県道29号線沿い、沖縄県立芸術大学食堂の位置に存していた。

調査地の地形は、南側が高地で北側が低地であり、北は「崎山馬追い（馬場）」に面している。このような地形から、北側に門口があったと想定される。

検出された石垣1・2は、近世期に構築されたと考えられることから、「真壁御殿あむしられ」期に該当する遺構である。しかし、礎石など屋敷を何わせる遺構は検出されなかった。円形遺構や石敷遺構は、近代の遺構とみられる。

今回、特筆すべき遺構として、ピット群がある。これは、調査地南側より検出されたものであり、密集してあったことから、畑跡であると判断した。これらが検出された土層は中国産磁器や土器などが主要遺物であることから、グスク時代の遺構であると考えられる。

調査地は、グスク時代には畑地として利用されており、近世期には「真壁御殿あむしられ」の屋敷の一部となっていた。その後、屋敷地は分筆され戦前は4区画に、現在は6区画に細分筆されている（第6・8図参照）。

遺物は、沖縄産陶器など近世に属するものがその殆どである。器種は、碗・小碗・皿といった食器類、壺・鉢・播鉢などの貯蔵具や調理器具など多種多様な資料が得られている（第6表参照）。

なお、首里は去る大戦によって米軍の集中砲火を及び、壊滅的な被害をこうむった地である。調査地においても砲撃によるとみられる大穴が確認され、内部には焼けただれた瓦などが多量に充填されていた。

今回の調査は個人住宅の建築に伴うものであり、調査期間・費用などにおいて厳しい制約があったが、往時の崎山村の端緒を掴むことができた。今後も調査を継続し、崎山村一帯の全容解明に繋げていきたいと考える。

本報告書では紙面の都合上、沖縄産陶器などの遺物に関する項目を割愛した。これらについては、後日、改めて報告する。

参考文献

- 『五番 486』『氏集 首里 那覇』那覇市史 史料篇 第1巻5 企画部市史編集室 那覇市役所 1976
- 『真壁』『沖縄県姓氏家系大辞典』沖縄県姓氏家系大辞典 編纂委員会 株式会社角川書店 1992
- 『あもしられ』『沖縄古語大辞典』沖縄古語大辞典編集委員会 株式会社角川書店 1995

第6表 出土遺物一覽

遺序	種類	中國産												東南アジア産			土器		
		白磁		青磁		青花		青磁染付		鉄胎青花		磁胎青磁		磁胎青磁	磁胎青磁	磁胎青磁	磁胎青磁	磁胎青磁	
		類	数	類	数	類	数	類	数	類	数	類	数						
I	表土																		
	小計																		
II	表土																		
	小計																		
III	表土																		
	小計																		
IV	表土																		
	小計																		
V	表土																		
	小計																		
VI	表土																		
	小計																		
VII	表土																		
	小計																		
VIII	表土																		
	小計																		
IX	表土																		
	小計																		
X	表土																		
	小計																		
XI	表土																		
	小計																		
XII	表土																		
	小計																		
XIII	表土																		
	小計																		
XIV	表土																		
	小計																		
XV	表土																		
	小計																		
XVI	表土																		
	小計																		
XVII	表土																		
	小計																		
XVIII	表土																		
	小計																		
XIX	表土																		
	小計																		
XX	表土																		
	小計																		
XXI	表土																		
	小計																		
XXII	表土																		
	小計																		
XXIII	表土																		
	小計																		
XXIV	表土																		
	小計																		
XXV	表土																		
	小計																		
XXVI	表土																		
	小計																		
XXVII	表土																		
	小計																		
XXVIII	表土																		
	小計																		
XXIX	表土																		
	小計																		
XXX	表土																		
	小計																		
XXXI	表土																		
	小計																		
XXXII	表土																		
	小計																		
XXXIII	表土																		
	小計																		
XXXIV	表土																		
	小計																		
XXXV	表土																		
	小計																		
XXXVI	表土																		
	小計																		
XXXVII	表土																		
	小計																		
XXXVIII	表土																		
	小計																		
XXXIX	表土																		
	小計																		
XL	表土																		
	小計																		
XLI	表土																		
	小計																		
XLII	表土																		
	小計																		
XLIII	表土																		
	小計																		
XLIV	表土																		
	小計																		
XLV	表土																		
	小計																		
XLVI	表土																		
	小計																		
XLVII	表土																		
	小計																		
XLVIII	表土																		
	小計																		
XLIX	表土																		
	小計																		
L	表土																		
	小計																		
LXI	表土																		
	小計																		
LXII	表土																		
	小計																		
LXIII	表土																		
	小計																		
LXIV	表土																		
	小計																		
LXV	表土																		
	小計																		
LXVI	表土																		
	小計																		
LXVII	表土																		
	小計																		
LXVIII	表土																		
	小計																		
LXIX	表土																		
	小計																		
LXX	表土																		
	小計																		
LXXI	表土																		
	小計																		
LXXII	表土																		
	小計																		
LXXIII	表土																		
	小計																		
LXXIV	表土																		
	小計																		
LXXV	表土			</															

圖 版



図版 1 掘削作業状況

1 段目左：掘削作業状況（南より）

2 段目左：掘削作業状況（北東より）

3 段目左：掘削作業状況（北より）

4 段目左：掘削作業状況（北東より）

1 段目右：掘削作業状況（西より）

2 段目右：掘削作業状況（西より）

3 段目右：掘削作業状況（北より）

4 段目右：掘削作業状況（北東より）



図版2 掘削・測量・完掘・石垣検出状況

1 段目左：掘削作業状況（南より）

2 段目左：測量作業状況（南西より）

3 段目左：完掘状況（北東より）

4 段目左：石垣1・3検出状況（北より）

1 段目右：測量作業状況（西より）

2 段目右：測量作業状況（南西より）

3 段目右：完掘状況（北より）

4 段目右：石垣1検出状況（北東より）



図版3 石垣・円形遺構・石敷遺構検出状況

1 段目左：石垣2 検出状況（北東より）

2 段目左：石垣2 検出状況（北より）

3 段目左：円形遺構検出状況（北西より）

4 段目左：石敷遺構検出状況（東より）

1 段目右：石垣2-①検出状況（北東より）

2 段目右：石垣3 検出状況（西より）

3 段目右：円形遺構検出状況（北より）

4 段目右：石敷遺構検出状況（南より）



図版4 ビット群検出・半裁・完掘状況

1 段目左：検出状況（東より）

2 段目左：半裁状況（南西より）

3 段目左：半裁状況 ビット No. 21

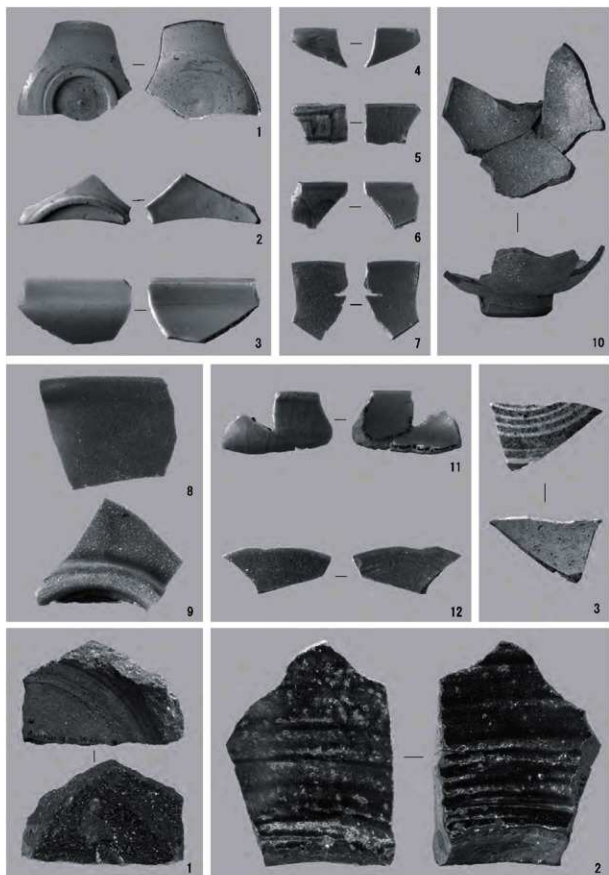
4 段目左：完掘状況（北より）

1 段目右：検出状況（南西より）

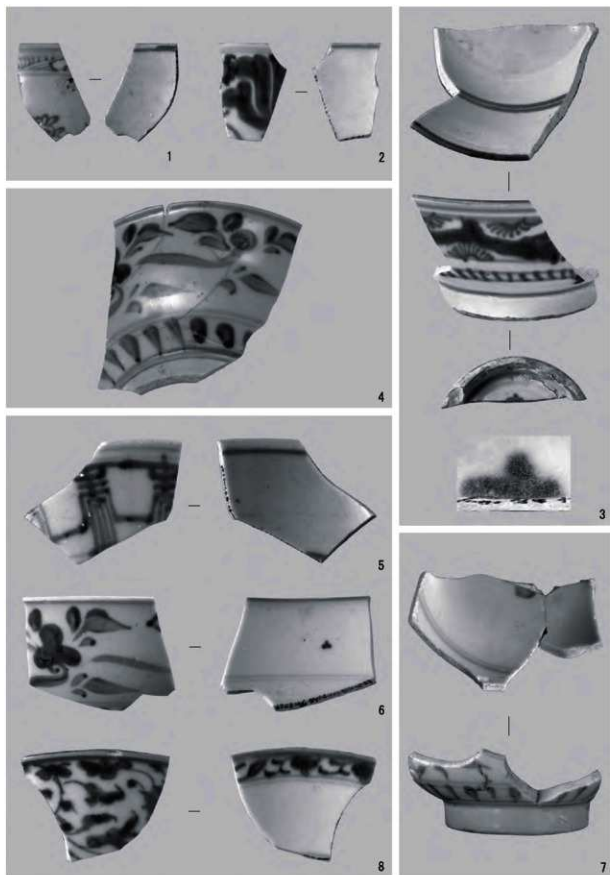
2 段目右：半裁状況（南西より）

3 段目右：半裁状況 ビット No. 17

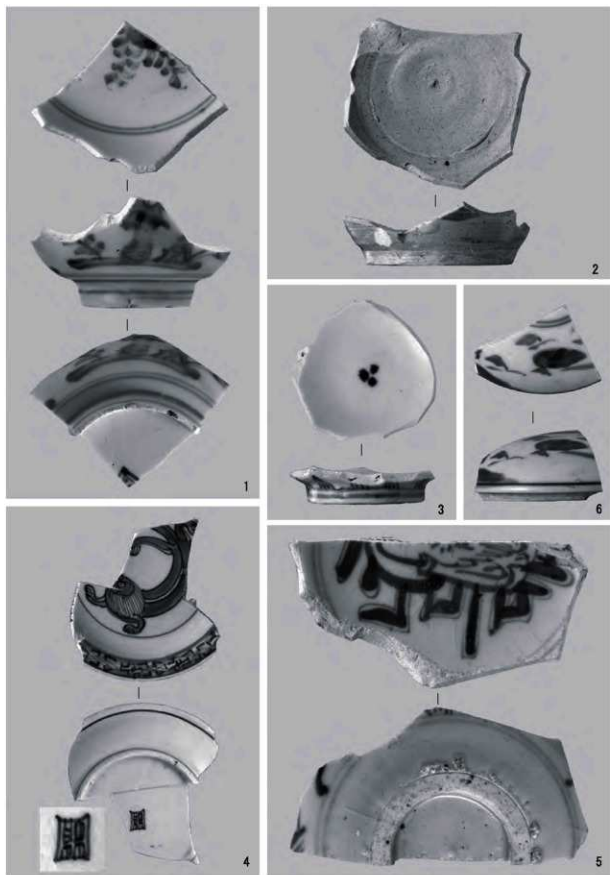
4 段目右：完掘状況（西より）



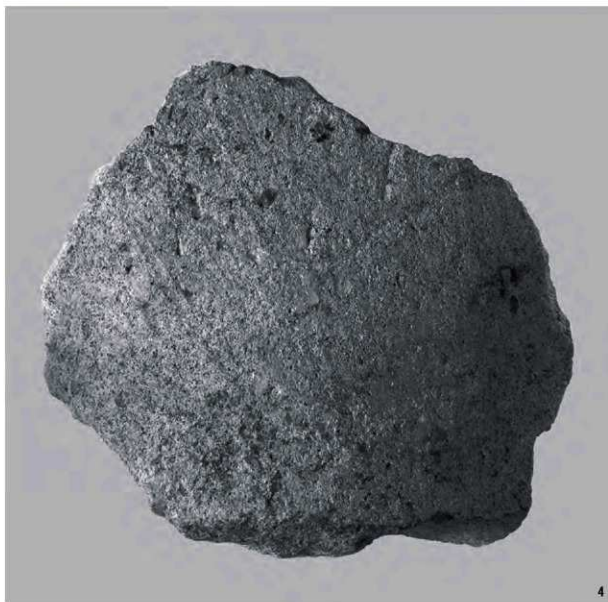
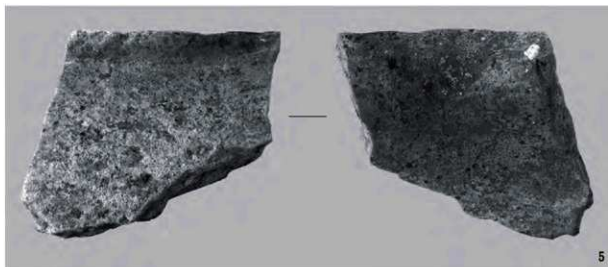
図版5 (第16図) 白 磁：皿 (1・2)、香炉 (3)
 (第16図) 青 磁：碗 (4~10)、皿 (11・12)
 (第19図) 東南アジア産陶器：壺 (1・2)、蓋 (3)



図版6 (第17図) 青花①:碗 (1~8)



図版7(第18図) 青花②:碗(1~3)、皿(4・5)、蓋(6)



図版8(第19図) 土器：壺形(4)、鉢形(5)

報 告 書 抄 録

ふりがな 書名	那覇市内遺跡 VI							
副書名	首里崎山村跡							
シリーズ名	那覇市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第102集							
編著者名	樋口麻子							
編集機関	那覇市市民文化部文化財課							
所在地	〒900-8585 沖縄県那覇市泉崎1-1-1 TEL.098-917-3501							
発行年月日	2015年 3月 31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
首里崎山村跡	沖縄県那覇市首里崎山町	47201		26° 12' 17"	127° 43' 54"	20090310 ～ 20090501	約300m ²	個人住宅 建築に伴う緊急発掘調査
				(世界測地系)	(世界測地系)			
所収遺跡名	種別	主要な時代		主要な遺構		主要な遺物	特記事項	
首里崎山村跡	集落 畑跡	グスク時代～近代		ピット群 石垣 円形遺構 石敷遺構		白磁 青磁 青花 東南アジア産陶器 土器 沖縄産陶器 本土産陶磁器 瓦 煙管 円盤状製品 石器・石製品 金属製品 銭貨		
要約	本書は、個人住宅建築に伴って発掘調査を行った首里崎山村跡の報告書である。調査においては、近世期の屋敷に伴う石垣や、グスク時代の畑跡と考えられるピット群が検出された。遺物は、沖縄産陶器を主要な遺物とするが、白磁や青花など中国産磁器も得られている。							

那覇市文化財調査報告書第102集

那覇市内遺跡VI

—首里崎山村跡—

発行 2015年3月31日
那覇市
〒900-8585 沖縄県那覇市泉崎1-1-1

編集 那覇市市民文化部文化財課
TEL 098-917-3501
FAX 098-917-3523

印刷 企画印刷 ハーツ
〒902-0071 沖縄県那覇市繁多川3-13-8
TEL 098-835-3752
